

小湊における標識着標ハクチョウ類放鳥記録

畠 山 正 光

昨年に続いて今年も白鳥に標識の着標計画を立て、県の指示に従い準備をすすめた。今年は昨年以上の捕獲をこころざし、昨年同様に山階鳥類研究所の吉井氏と県保護課の斉藤氏、私と小湊猟友会員の協力を得て3月18日にこれを実行した。実行に先立って、少なくとも10羽を捕獲の目標にしたのである。

さて、人員もそろったし、諸準備もととのった頃になると、野性の敏感さからいち早く周囲の状況を読み取って、シリシリと遠ざかる様子が見えて来たので、これは早く手を打たなければ失敗すると気付いた。そこで急いで行動に移ったのだが矢張り逃げられ、かろうじて3羽を捕獲するに止まった。それから種々取るべき処置をし、性の判別等を行ない、成鳥は雄、幼鳥2羽は雌である事を確認の上放鳥した。昨年の着標鳥は放鳥と同時にひどい目に会ったとばかりに東方に向かって飛び去ったが、今年のはにげもせず、翌日から餌に付いて、13号は4月1日、15号は2日、14号は4日に、それぞれ帰北の途に付いた。

14号が見えなくなった朝の9時少し前に、クッチャロ湖で13号を発見した旨を札幌の松井先生より電話通報あり、直に県の斉藤係官に報告した。帰る帰ると度々書いたが、小湊に渡来することを「帰る」と言うのが適当なのか、不適当なのかは私自身もわからない。此のように渡来、帰北共にクッチャロ湖を経由する事により渡来方向にやや確信を得る事が出来た。この事に付いてはどなたも異論のない事と思う。白鳥やその他の渡り鳥類の渡来、帰北の方向経路等が、次第に正確さを増して来つゝある事は着標の成果である。

しかし、最近は餌付けが問題視されて居るが、捕獲の容易さも帰って来た標識鳥の確認の容易さも、皆餌付けの成果であると私は確信して居る者である。餌付けでもして居らなければ番号を読み取れる程の近距離迄は近寄って来ないであろう。ただし、餌付けの方法を検討する必要があると私も考えている。しかし、自然の餌が豊富であれば餌付の必要はあるまいが、餌の豊富な渡来地はそんなにあるまい。当小湊も御多間にもれず年々餌の不足を来たして居る。渡来地の自然を守ってやる事は人間には出来ることであるが、そのためには人間に守る心がなければ出来るものではない。しかし、白鳥の渡来地の自然は是が非でも守ってやらなければならない。それには好き嫌いに関係なく、渡来地の市町村の協力が絶対に必要である。人間が守ってやらなければ鳥獣でも自然でも滅びてしまうであろう。そして自然が滅ぶときは人間も滅びる事を忘れてはならない。理解を求むること切なるものである。